

## 令和6年度 第3回 藤枝市認知症とともに生きる共創のまちづくり委員会 議事録

- 日時：令和7年1月8日（水）午前10時00分～11時30分
- 場所：藤枝市役所 西館5階 大会議室
- 委員出席者：  
永井委員、長野委員、金子委員、山本委員長、梅原委員、原川委員、塚本委員、西尾委員、亀澤委員、嵐口委員、内村委員、夏賀委員

### 1. 開会

### 2. 委員長あいさつ

新年が明けてすぐのお忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。ワークショップから骨子の話まで話すべきことが多くあるが、活発なご意見をいただきたい。

### 3. 健康福祉部長あいさつ

先月、国の認知症施策推進基本計画が閣議決定された。

本市においても、先月ワークショップを開催し、認知症施策推進計画の策定に向けて取り組んでいる。計画策定のためには、皆様から活発なご意見を頂戴し、意見交換をしていければと考えているので今後ともよろしくお願ひしたい。

本日の委員会は、先日開催したワークショップや2回目のワークショップについてが主な内容になる。協力いただきたい。

課長：藤枝市認知症と共に生きる共創のまちづくり委員会規則第5条第2項の規定により、半数以上の出席を得ているため、会議の開催が成立したことを報告する。

本日の議事だが、(1)第1回認知症とともに生きる共創のまちづくりワークショップの報告について、(2)第2回認知症とともに生きる共創のまちづくりワークショップの進め方について、の2件となる。

### 4. 議事

#### (1) 第1回認知症とともに生きる共創のまちづくりワークショップのまとめの報告について

課長：ここからは、委員長に進行をお願いする。

委員長：第1回ワークショップの報告について、事務局よりお願いする。

事務局：第1回認知症とともに生きる共創のまちづくりワークショップの報告をさせていただく。委員の皆様においては、ワークショップ開催にあたりご協力をいただき感謝申し上げます。

資料1は、当日実施したワークショップのアンケートをまとめた資料である。参加者が39名であり、年代については資料1の通りである。若い世代は中学生や、地域包括支援センターの実習生が参加してくれた。立場については複数回答であり、市民や医療介護従事者が多く参加

してくれた。ワークショップの感想としては、「満足」75%、「やや満足」が19%であり、「満足」「やや満足」が90%以上を占めている。

感想の理由としては、「本人の声を聞くことができたこと」や、「様々な立場の人と意見を聞いたり、共有できたことが良かった」という感想が多くあった。

「認知症であることを周囲の人や身近な地域で安心して話せるか」という問いには「そう思う」と答えた方が63%、次いで「わからない」と回答した方が31%という結果であった。それぞれの理由については、「そう思う」と答えた方は、「今回のワークショップを通して色々な意見が聞けて、前向き気持ちになった」や、「これからの地域がオープンにできる環境に進化していくことを望む」、「知ってもらった方が気持ちが楽になる」という意見があり、「わからない」と答えた方は、「どこまで理解が得られるかがわからない」、「そのときの自分の状況がわからない」、「イメージが具体的に持てない」という意見があった。以上がワークショップの報告である。

ワークショップ当日の流れだが、条例の説明をした後、永井委員と、県の認知症ピアパートナーである富士市の当事者 森 累美子さんに登壇いただき、リレートークという形で、診断されたときや今の暮らしの中での思いをお話いただき、その後グループワークをした。

当日は、各グループ5～6人の7グループで、各グループに委員に入ってもらい、ファシリテーターや書記を務めていただいた。

グループワークでは、①認知症とともに生きることができるとともに必要なこと、②私たちにできることの二つのテーマで意見交換を行った。付箋を使いながら意見を出し、模造紙にまとめ、最終的に発表して意見を共有した。時間が足りない部分もあったため、第2回のワークショップでは反省を生かしていきたい。

資料2は、それぞれのグループで出た意見を、キーワードごとにまとめたものである。相互に関係することもあり分けるのが難しいところもあった。①安心して認知症とともに生きることができるとともに必要なことでは、[理解]に関する意見がどのグループでも出ており、その中でも「当たり前は人それぞれである」、「1人1人が認知症について正しく認識する」、「子供の頃からそういった機会があるといい」などがあった。

[支え合い]では、「挨拶が気軽にできる」、「柔軟に声かけられる」、「同じ立場で生活ができる」という意見があった。

[環境]では、ハード面、ソフト面含め、幅広い意見があったため、共通するカテゴリーに分けている。「周りは本人が何に困っているのかわかりづらいが、本人の声を聞いて、生活する上で障壁がたくさんあるということに気づいた」、「スーパーなどの買い物するとき、安心して支払いができるといい」、「スーパーや銀行、市役所など認知症にやさしいまちづくり」、具体的なものだとして、「お金の管理や手伝いができる仕組み」、「ゴミの分別やゴミ出し」、「家族だけでなく社会みんなでみる」などの意見もあった。

〈外出〉のカテゴリーでは、「行きたいところに自由に行ける」、「車が運転できなくても困らない地域」、「疲れたら休める場所があって気軽に出かけられるといい」、「水路の方や安全な歩道が必要」という意見があった。

〈働くこと〉のカテゴリーでは、「認知症の方も家族も仕事を続けられる周囲の理解」や、「認

知症になってからも働ける職場」、〈居場所〉のカテゴリーには、「本人も家族もそうでない人も、垣根を作らず集えるようになる」、「自助グループやピアサポートがあるといい」などの意見があった。

〔自立をサポートする〕では、「まずはやってみる。失敗してもいい、そういった理解が必要」、「本人がやりたいことや仕事など好きなことをやれる」、「落ち込まないで希望を持てることが必要」という話があった。

〔相談体制〕では「困っている人が自ら意思表示ができる」、「早い段階から気軽に行ける窓口」、「声をかけて繋げる役割の人を多くしていくことが必要」という意見があった。

〔家族支援〕では、「家族のサポートが大事」、「家族の悩みや愚痴を聞いてもらえる人や場所が必要である」などの意見があった。

グループワーク②では、私たちにできることについて意見交換したが、それぞれが自分ごととして考え、多様な意見があった。

〔理解を深める〕では、「認知症の本人の言葉にしっかり耳を傾ける」、「当事者のメッセージや工夫を短い動画でつくる」、「条例についてみんなに伝え、一緒に考えていきたい」、「認知症のことを正しく理解してもらえるよう様々な年代に伝える場を設ける」、「今日のこのワークショップに出席し、得た学びをできる限り多くの場で発信していくことができる」ということが挙げられた。

〔支え合い〕では、「困っている人がいたら声をかける」、「話し相手になる」、「本人も周りも言いやすい環境づくり」、「自分自身がこの人なら言ってもいいという人を作っておく」、「先回りしてやるのではなく見守る」、「本人の意志、望む生活をあらかじめ聞いておく」ということが挙げられた。

〔環境〕については、「本人に助けてほしいことを教えてほしい、知りたい」、「安心して買い物できる店舗づくり」、「先回りをしてヘルプをしない」という意見が挙げられた。

〔外出〕に関しては、「認知症で外に出て迷ってしまう人に対する対策を考える」、「1人で外に出ても大丈夫のように名前や住所がわかるようにする」ということが挙げられた。

〔環境〕全体に共通することとして、「その人らしさを大切にできる環境づくり」、「困っていることをどうにかするというより、やりたいことを一緒にやる」、「これまでの考え方から視点を変える」という意見があった。

〔本人が力を生かす〕では、「自分のできることをやる」、「自分なりの工夫、わからないことは自ら伝えていく」という意見があった。

〔医療や介護の連携とサポート〕では、「診断や治療、家族の理解、指導、ケアマネとの連携」や、「かかりつけ医の理解の向上」、「安心すこやかセンターを知ってもらう」、「適切な福祉サービスに繋げる」、「認知症の方を地域で支えるための地域づくり」、「家族以外に本人を支えるチームを作る」という意見があった。

〔家族のサポート〕では、「家族の話聞く」、「家族として困ったときは積極的に周囲にヘルプを求める」、「介護者が孤立せず繋がれるようにする」、「家族の話聞いて気持ちを楽しむ」という意見があった。

これらの意見を計画の目標や方針、具体的施策にさらに整理していきながら、次回3月の委員

会では、資料4のとおり、基本方針、基本施策案を示し検討していきたいと考えている。以上が第1回ワークショップの報告である。

委員長：参加いただいた方もそうでない方もいると思うので、気づいた点や反省点も含めて、ご意見を頂戴できればと思う。参加してどうだったかをぜひ聞かせていただきたい。

委員：私も参加させていただいた。先ほどの紹介にもあったが、具体的な問題点やアイデアが網羅的に出て良かったと思っている。これを一つ一つ個々の施策に活かしていければと思う。

委員長：特に興味深かった点などはあるか。

委員：環境の面。環境や外出など、私個人では気が付かなかった。

委員長：当事者の方の話を聞いてよかったとアンケートにもあったが、そこが入り口としてあったことが非常に大きかったと事務局からも聞いている。

グループワーク①と②で被っている意見もあるが、グループワーク①では、行政など公的な分野でまちづくりや政策として取り組むことや、共助で取り組んでいく部分もあると思う。グループワーク②では、個人、あるいは家族や仲間として明日からでも何かアクションとして起こせるものという気がしている。アクションの層が少し違うということが逆に良かったと思う。グループワーク②の整理で、具体的に自分が何をしたらいいのかイメージを持ってない方に、イメージを持っていただくことができると思うので、結果をどのように市民に周知していくのかも大事になってくる。参加者39名のうち、委員以外の参加者はどのくらいか。

事務局：22名である。

委員長：駅南図書館で、日曜日の午後のイベントとして、このテーマで考えると、ある程度集まっていたという感じか。

事務局：会場のスペースを考えると、ちょうど良い人数であった。

委員以外にも地域包括支援センターの認知症地域支援推進員や職員も進行や書記を協力してくれたため、大変助かった。

委員：私も参加させていただいたが、当事者の話も聞けたし、どういうことに困っているかということもよくわかった。お店やスーパー、銀行など、最近便利になったことが当事者にとっては、不便に感じるということを知った。

ゴミの回収の仕事をしているが、一般家庭からお願いされるときも、ゴミの分別がわからないと言われることがある。できるだけ分別をお願いしますと言っても、当事者にとっては分からないところがあり、身近なこととして感じた。

企業の方、スーパーとお店、銀行、一般市民の方の参加がもう少しあれば、認知症に関する理解が深まるのではないかと感じた。あとは若い方、学生や今後、医療や福祉に関わっていく方にも聞いてもらえれば非常にいいと感じた。

委員長：お店、企業の方の参加が4名とあるが、他3名は、ご同業の方に声をかけられたのか。

委員：自分の会社から他2人参加した。

委員長：その他に1人お店の方が参加した。もう少し広がりがあった方が良かったということか。

委員：そう感じた。

## (2) 第2回認知症とともに生きる共創のまちづくりワークショップの進め方について

委員長：1回目を踏まえて、2回目のワークショップの議題に入らせていただく。この後の議題の中でも1回目のワークショップの気づきや意見などがあれば、発言いただきたい。第2回認知症とともに生きるまちづくりワークショップの進め方について事務局から説明をお願いします。

事務局：2回目は、2月3日（月）14時から、生涯学習センターで計画している。1月5日号の広報ふじえだに掲載したが、多様な年代や立場の方に1人でも多く参加していただきたい。

前回の委員会で、ビジネスケアラーの方々が障害も含めて介護をしながら働く、子育て世代の育児休暇など、働き方改革の中で経営者の立場から考えなくてはならないことが多々あり、認知症に限らず、多分野の課題に包括的に取り組んでいけるといいという意見もあった。1回目は日曜日の開催で、企業の立場から参加がしにくかったため、今回平日に開催する。1回目では、お店のレジやトイレの環境など、認知症であってもなくても、利用しやすいお店など「環境」に関して色々な意見が出ていた。そういったことも2回目のワークショップで深めていきたい。

男女共同参画・多文化共生課という部署があり、働きやすい職場環境の認定制度がある。現在、認定事業所が市内で102ヶ所あり、介護事業所や藤枝商工会議所も認定を受けている。大企業もだが、小売店など小さいお店も認定されており、2回目のワークショップは、認定事業所にも働きかけてもらうよう男女共同参画・多文化共生課に依頼した。産業政策課という部署もあり、関わりのあるお店や企業に働きかけてもらうよう声掛けをしている。商工会議所のホームページに掲載を依頼し、福祉の分野を超えて、周知を進めている。認知症の人がお客さんの立場で利用する視点と、従業員の働きやすさという視点で、認知症になってからも暮らしやすいまちづくりについて意見交換ができるといいと思っている。

1回目のワークショップでは時間が足りなかったこともあり、2回目は30分延長し、16時半までとした。余裕を持って進めたいと思っている。

委員長：2回目に向けて準備が必要なことなど、ご意見をいただきたい。

委員：会場は生涯学習センターの1階ホールでよいか。

事務局：ホールで座席は出さず、椅子と机を設置し行う予定。

委員長：部屋が広すぎることはないか。参加者が少ないとだだっ広いことにならないか。

事務局：過去に同じような形でワークショップを行っており、違和感はないかと思う。

委員長：グループの人数を何人にするか。

事務局：5～6人が話しやすいかと思っている。

委員長：隣の声が聞こえてきて集中できないという話もあったので、広いと隣のグループと距離もとれていいと思う。グループの人数はやはり5～6人でないと1人1人意見を出しにくいところもある。トークセッションは、どのような方に話していただく想定か。認知症の人、ご家族、お店や企業の方と3者に話していただくよう段取りに入っているのか。

事務局：段取りに入っているところで、企業にお願いする予定。

委員長：それぞれの立場からということに主眼がある。1回目は当事者2人にお話いただいて、2回目もそれを踏まえ、家族の立場や、お店企業の立場からお話をいただくことで、グループワークをどのような内容で話してもらうかナビゲートすることを意図していると思う。

事務局：環境や外出、働くことにフォーカスしてもいいかと思っており、理解や支え合いにも関わる部分でもあると思う。

委員長：ある程度、意見は重なってもいいという感じか。

事務局：良いと思っている。

委員長：新規の参加者を増やしていくことの方が目標になるかと思う。ただ、グループワークのテーマは、1回目と同じか、それとも立場を意識したテーマにするのか、皆さんからアイデアがあればご意見いただきたい。

事務局：話しやすいグループにするには、立場の偏りがいいのか、当事者は当事者のグループが話しやすいのかなど、色々考えた。

委員長：それぞれの立場の視点が出るように、様々な立場の人たちがまんべんなくグループの中にいた方がいいと思う。

委員：介護と医療関係者のグループだったので、様々な立場の方の話が聞けなかった。お店の方の環境などの話は一切でなかったで、生活している実際のリアル感がなかった。いつも同じような所で話をしているメンバーで、グループワークをしていても新しい感想はあまりなかったので、できたら散らしていただきたい。

事務局：意図的に同じ立場同士でグループにした。

委員長：今回は、様々な立場のグループにしてもいいかと思う。

委員：グループのメンバーが男女混合の方が様々な視点があるのと、住民も専門職もみんな一つのチームの方が色々意見があっていい。1回目は、自分のグループで男性がいなかったため、不満の声があった。当事者の声を聞きに来ているという意見があり、本人や家族の意見も、グループワークの中で聞きたいという話も出た。

委員長：リレートークだけではなく、もう少し深くグループワークで聞きたかったということか。

委員：グループワークなので自分たちでコミュニケーションを図りたい。自分のグループではなかったが、ファシリテーターの問題で、制度説明に走ってしまうことがあった。ファシリテートする人は、きちんと事前に打ち合わせをして、目的やどういう役割で何をやるのかを詰めておかないと、目的からずれてしまうのではないかと思った。

生涯学習センターのホールであれば、かなりのファシリテーターが必要になり、進行をサポートする人も必要になるので、人材の確保をどう考えるのか。募集をするのはいいが、裾野を広げると各グループをコントロールする人も当然必要になるので、少し心配である。

委員長：マネジメントの部分について、事務局の方はいかがか。

事務局：たくさん参加していただければ嬉しいが、その分グループが増え、ファシリテーターや書記の数も必要になる。

委員長：今ご意見いただいたがグルーピングをして誰にマネジメントしていただくのか、そして、目的の共有等の事前の準備は時間的に可能か。

事務局：1回目も委員には30分ほど早く来ていただき、打合せを行った。次回もご協力いただければと思っている。

委員長：委員以外で専門職がファシリテーターや書記をしてくださったと話があったが、その方々も事前の説明会には参加したか。

委員：各地域包括支援センターに地域支援推進員が配置されており、また、認知症初期集中支援チームが設置されているので、そこを担う人に依頼があり、各包括から可能な限り1名の参加があ

った。

委員長：もう少し準備をしっかりとの方がいいという話だったが。

委員：このワークショップは、こういうことがあったらいいよな、ああいうことがあったらいいよねと、裾野を広げてワークをする中で絞り込んでいきたいという趣旨なのかと思っているので、1回目のワークショップでは、みんなで支える方に向きを持っていくようにした。制度の説明は、聞けて悪くはないが、今回のワークショップではどうかと思う。色々立場が異なる中でも、平等な立場で意見交換、ディスカッションをする、正解もなければ間違いもない、そういう場面設定だと思っていた。意思統一、やる側の認識が、もう少し丁寧に説明がある方が目的の理解も含め図られると思う。私達は専門職側に引っ張りたがるという傾向がなきにしもあらずで、やはり知識がある分、こういうことあるよ、こういうこともできるよと言いたがるが、そうではなく、これからこう生み出していきたいという、多様な発想や今携わっていない人の視点など、面白いことはいっぱい出てくると思う。何を喋ってもいいし、どういう意見でもよくて、質より量でカバーする、そういうグループワークだと思っていた。少なくともファシリテートする側の意思統一は、あった方がうまくいくのではないかと思う。

委員長：一応説明はされたということだが、趣旨を理解していただけるように改めて工夫していく必要があるということではいか。

事務局：色々なことを話していただいて良いが、こちらの意図としてはともに生きる社会を創っていくために、自分の立場だったら何ができるかという意見がたくさん出るといい。そういう視点でファシリテートしていただけるといいと思っている。

委員：今のような形で、事務局ではこう思っていて、こういう形で、ゴールはこういう設定にしたいので、そこにエッセンスを加えていってほしいということ、事前の打ち合わせのときに共有しておけばいいのではないか。

委員長：ファシリテーターに、グループに参加している人が1人最低1回から3回、全員発言できるように振って、意見を活発に出してもらうように立ち回っていただく。それができれば様々な立場の意見が自然と出てくることもある。性的マイノリティのミーティングのときには、他者を傷つけないために、参加者にも資料を配って、人の声を遮らない、大きい声を出さない、人の話は最後までしっかり聞くなどをあらかじめ決めておく。悪気がなくても気持ちが熱くなってくると、相手の気を封じてしまうときがあるので、参加者にもわかっておいてもらおうと、ファシリテーターが奮闘するだけでなく、参加者の方々も協力的にそれぞれの立場の意見を出していただけるのではないかと思うので、そういう工夫を次回は意識してやってみたらいいと思った。

事務局：2回目の打ち合わせのときには、1回目の振り返りを踏まえた上で、趣旨や目的の部分を丁寧に確認して進めていきたい。

委員長：前回の説明は口頭だったのか。資料にはされたか。

委員：資料をもとに説明を受けた。事前に資料があるようであれば先にいただきたい。当日も、事務局から条例の説明していただいたときに、色々声をいただき、みんなと創っていきたいというのを、もっと強く伝えていただけるとよかった。条例もなんとなくフワッとした説明である印象を受けた。

委員：共創のまちづくりの動画を初めに出すのがいいのではないかな。初めに動画を流して、当事者の話を聞くとインパクトあると思う。

委員長：基本計画もできて、条例のみならず国の方の動きもあるので、次回は本市の条例に国の動向も追加で説明しつつ、動画も活用して、ファシリテーターの協力も得やすいようにマネジメントしていきたいと思う。こういう積み重ねをしていくことでノウハウが積み重なっていく。こういうことが藤枝市内のコミュニティセンターや公民館などの地域単位で行われていくのが理想である。今回のワークショップのように、当事者がいて家族がいて多様な立場の方が話しやすい環境を作ることが手法としても、今後活かされていくと思う。この場だけで終わらない意味のある作業になると思う。

委員：学校関係の話だが、2月3日月曜日だと、この時期は受験や資格の試験があるかと思う。学生の参加は先ほどもすごくいいと思ったが、2回目の時期は参加できそうなのか。

委員長：私もこのチラシを授業で配ろうと思っている。この時期はちょうど試験期間中に入っているか、私学だと春休みに入り始めるので時間があるのではないかな。今からアナウンスをすると、関心のある学生は来られる、空いている時期。看護系福祉系はどうなのか。

事務局：1回目を日曜日に開催したことの背景に、若い世代が参加しやすいのではないかなということがあり日曜日に設定をした。私立大学や市内の高校にもアナウンスし、直接訪問して説明をさせてもらったが、なかなか参加に結びつかない。別の方法でのアプローチも必要と思っており、難しさを感じている。

委員：例えば地域包括支援センターで、社会福祉士の実習や看護学生の受け入れをしているので、私達もこういうことをやっていると伝えるといいのかなと思った。

委員：静岡福祉大学の実習指導者や、実習生の発表会が近々あるので、そこを使うのはどうか。各包括ができるだけ、未来の人たちを受けると協力させてもらっている。こういうものがあるということ、目に触れてもらうのと、実習している3年生は、まだ受験ではないので良いのではないかな。

委員：1回目のワークショップのとき、1名、社会福祉士の実習生に参加いただいた。学生からもとても良かったと伺っているので、お互いに活用ができて、とても良かったと思う。

委員：当事者や家族の声から、そう考えているんだ、そういう苦労があるんだと、我がごと引き寄せて自分にできることはというふうに考えてもらいたいとすると、本人や家族にどういうふうに参加してもらえるか。このトークセッションで「働く」であったり、制度も含めて情報を得ること、企業がそういう制度があるということを書いてくれると良いが、違う場合はそういう視点も必要。

事務局：いくつか企業を回らせてもらい、育児介護休業法で介護休暇を取れている方がどのくらいいるのか、そういったところもヒアリングさせていただき、積極的にやっているところと、そうでないところとあった。想定していたのは、働きやすい職場づくりとして企業がどういうことに取り組んできているのか、実際に介護休暇を取られている家族がどういう職場だと働きやすいのかという視点でお話をいただいてもいいかなと考えている。

委員長：いいのではないかな。企業の立場と言っても雇用する立場もちろんあるし、当事者、家族ということもあるし、消費者として迎え入れる立場もある。企業やお店といっても色々な視点から

の話がおそらく必要になってくるかと思う。当事者の方や家族の方はどうしても参加が限られてしまうが、ニーズがとても高いので、参加者が多くなればなるほど、各グループに入るのが理想だが、そのあたりはいかがか。

委員：過去に、ケアマネジャーが自分の担当している本人、家族と参加する研修があり、グループで生の声を聞く研修を開催したこともある。

事務局：1回目のワークショップのときも、ケアマネジャーに、本人と一緒にご参加くださいと声をかけさせてもらっていたため、再度お願いをさせていただく。

委員：本人だけではなく家族にも声をかけていきたいと思う。

委員：以前の委員会で、「新しい認知症観」がなんとなく引っかかっていたということを言わせてもらった。そこを払拭するのに、他人ではなく、本人が話してくれた言葉に納得できた。1回目のリレートークで、森さんと永井委員にお話しいただいた中で、ご本人達が「認知症は不便ではあるけど、不幸ではない。」「制限はあるけど、終わりじゃない、誰でもなるよ」という言葉が、ご本人だから言えることだと職員と話をした。誰でも思いつくかもしれないが、何の障害もない自分が認知症は「不便だけど不幸じゃない」と言ってもそれは全く落ちてこない。先ほど本人の声をグループにと話があったが、リレートークだけでも刺激があったので、グループワークでのディスカッションでも、ご本人たちの声が聞けるといいと思った。ご本人2人から最後の感想も含めてお話が聞けてとても良かったので、力を入れていけるといいと思う。

委員：1回目のグループワークで、当事者のグループで話し合わせていただいたが、こういうことが必要ではないかと漠然と考えていたものが、ご本人たちが困っている場面を具体的に話してくださったので、こんな介入ができるのではないかと、より明確になってきた。リレートークでも2人から話を聞いたが、さらにグループワークの中で直接お話させていただくことで知り得たことは、すごく大きかった。もし可能なら、グループに1人ないし2人ぐらい当事者に入っていたらいいと思った。

委員長：当事者への期待が高まっているが、無理のない範囲でご参加いただければと思う。事務局でもまた調整していただきたい。事務局でさらに検討していただき、2回目のワークショップに向けてご準備いただきたい。議事としてはこれで終了とする。

## 5. 連絡事項

委員長：意見を今後どのように活かしていくのか含めて、事務局からご説明いただきたい。

事務局：資料4が、スケジュールの案である。前回お渡ししたものに、12月3日に国の計画が閣議決定されたことを追加し、本日3回目の委員会が終わったところである。2月3日に2回目のワークショップを行う。

資料5になるが、国の計画の概要版を配らせていただいた。概要版にも記載のある、基本的な方向性や新しい認知症観、共生社会の実現は、市の条例と目指す方向性は同じである。最後のページに重点目標・評価指標があり、今後の市の計画にどのように反映させていくか、考えていきたい。目標を設定すると、どう評価していくかということにもつながるので、時間があるときに見ていただきたい。

事務局：次回の委員会について日程調整をさせていただく。

⇒第4回委員会 日時：令和7年3月13日（木） 午後2時～

場所：藤枝市役所西館5階 第3・第4委員会室